John Lylyの後期喜劇に関わる政治的環境と少年劇団
――*Midas*（1589）を事例として

佐　野　隆　弥

Ⅰ　Introduction

John Lylyの演劇界への参入と劇作家としてのデビューにまつわる状況とを明らかにするために，著者は先に，彼の処女作とされる*Campaspe*（1584）の創作環境と初演の現場を検証し，その上で劇作家Lylyの誕生を解明する議論を行った.[1] その際に注目したのが，William Cecilを介した，第17代オックスフォード伯爵Edward de Vereとのパトロネッジ，ならびに伯爵がそのマネジメントに関わったブラックフライアーズ座とオックスフォード少年劇団とであった.

さて，*Campaspe*をめぐる先の議論においても指摘したことだが，Lylyのキャリアには，上述のようなCecil家およびその親族とのコネクションが絶えず見え隠れしていて，この関係性こそLylyの経歴のかなめと考えてよいと思われる.[2] そして，このLylyとCecilとの直接的な関係と考えられる事象が再び浮上するのが，1588年のマーティン・マープレリト論争前後の時期であった．本論では，劇作家としてのLylyの後半期の活動を分析対象とし，該当時期におけるLylyの政治的振る舞いを解析し，その際のセント・ポール少年劇団の機能についても可能な限り調査を試みたい.

Ⅱ　Why *Midas*？

では，本論の目的のために，なぜ*Midas*を事例として取り上げるのかについて，次に考察する．Lylyのキャリアにおいて，一般に1588年に創作されたとされる*Endymion, the Man in the Moon*（以下，*Endymion*と略記）以降の作品群が「後期喜劇」に該当するが，政治的アルージョンの濃密さという観点から見た時，*Midas*は*Endymion*と並んで――ただし，批評上の注目度は圧倒的に*Endymion*が上回るが――双璧をなすと言ってよいであろう．しかし，

*Endymion*の政治的表象は寓意性が極めて高く，Elizabeth Ⅰとの照応を除けば，そのアレゴリーは多様な解釈を許容する，換言すれば，ピンポイントで特定の政治的事象を確定することが困難である一方，*Midas*には明白なスペイン関連の言及が存在することも，本論の立脚点から見た場合，意味のある現象となってくる．

その上で*Midas*選択に関してより重要な理由は，*Endymion*と*Midas*の創作時期の相違にある．この2作品は2年程度の間隔を置いて執筆されている．Lylyの作劇活動の順序から言えば，隣接する位置にある戯曲と言ってよい訳だが，実はこの2年の間に，実際イングランドの演劇界を揺るがす，いくつかの事件が発生していることを見逃す訳にはゆかない．それらはイングランドの宗教政策に根本から関わり，イングランドの政治体制そのものにも影響を与え得る出来事――つまり，1588年7月のアルマダ海戦であり，また1588年の10月に刊行された*The Epistle*と題されたパンフレットを嚆矢とするマーティン・マープレリト論争――ということになる．

さて，少年劇団の活動が1590年頃からおよそ10年間停止に追い込まれたことは，よく知られた演劇史上の出来事だが，この事象を生起させた直接の原因は，Lylyがこの論争に介入するような状況に置かれ，その一連の振る舞いの中での何かが当局の許容する一線を越えたことにある，と一般には推測されている．仮にこれが正しいと措定した場合，*Midas*の創作と上演は，マープレリト論争というLylyにとり複雑で厄介な――と同時に，政治的上昇志向を持つ人間にとっては，うまく立ち回れば立身のチャンスとなるような――課題への対応と，同時並行的に処理されていた確率が高くなると考えられる．その意味で*Midas*の分析は，Lylyの劇作家としての活動の後半期，中でも最もクリティカルな局面をのぞき見る，重要な手続きと考えてよいと思われる．

Ⅲ Starting with *Endymion*

では，*Endymion*を出発点として，Lylyの活動を時系列でたどってみることにしよう．*Endymion*に関して，先ず最初に利用できる確実なデータは，グリニッジでのセント・ポール少年劇団による御前上演であり，1588年2月2日のことであった．したがって，同作品の創作時期はこれに先行する時期となるが，現在のところ正確な同定は困難な状況にある．

附属資料のリストが明示するように，*Endymion*の御前上演に先立って――

と言うよりも，直前に，と表現した方が正確だが――同じ1588年1月1日に，やはり同じくグリニッジでセント・ポール少年劇団による*Gallathea*が，おそらくはリヴァイヴァルの形で御前上演されている．ここから何か言うことは可能であろうか．*Gallathea*は諸説あるものの，初演もしくは推定創作年代として1584－85年頃の可能性が疑われており，もしそうであれば，Lylyの劇作家としてのデビュー作である*Campaspe* や*Sappho and Phao*（1584）ともかなり近い時期に作劇されたドラマということになる．

その意味で*Endymion*の創作の「上限」を決定する何らかのデータとして，*Gallathea*をめぐる情報はあまり利用価値のないものとなる．このように，*Endymion*がカヴァーし得るトピカル・アルージョンの範囲は不明であるにもかかわらず，*Endymion*のアレゴリカルな読みを試みる研究者たちは，古くは1580年前後から直近の1588年にかけての政治的状況をこの作品に投影してきた．おそらく，その最大の理由は，Lylyが該当神話のヴェクトルを逆転させたことにあると考えられる．

通常の神話であれば，月の女神が地上の羊飼いであるEndymionに恋慕し，毎夜天上から睡眠中の彼の元を訪れ抱擁するという，下方移動・下降を特徴とするものである．Lylyはこのヴェクトルを反転させ，女神に献身的な愛を捧げるEndymionを設定することで，地上の崇拝を一身に集める求心的な存在としての月の女神を具現化したのである．

初期近代イングランドにおいて，処女王Elizabeth Ⅰが月の女神として広く表象されていたことは周知の事実であり，そこから*Endymion*におけるCynthiaにElizabeth Ⅰを重ねようとする読みは，自然なものと言ってよいであろう．問題は，この女神にオマージュを捧げる人物や事象をどう捉えるかということになる．先行研究のあるものは，ここにLeicester伯やOxford伯を重ね合わせるようLylyが作劇することで，両伯爵と女王との関係性の改善をLylyが援護射撃しようとしていたとの主張を行っている.[3] しかし，両伯爵が苦境にあった時期や，*Endymion*創作の時期におけるLylyとOxford伯との関係を勘案すると，蓋然性は乏しいと言わざるを得ない．さらに近年では，David Bevingtonが，Mary, Queen of Scots処刑の結果，スペインとの戦争が避けがたくなった状況下で，イングランド国内のカトリック信者が女王への忠誠心を表明するための媒体として，*Endymion*を解釈しようと試みている.[4] しかしながら，（あえて強めの言い方をすれば）近視眼的な利にさといLylyにとって，ここでこの時期にカトリック勢力に与することで，どのような利得を期待することができ

たのであろうか.

総合的に判断すれば，Lylyにとっての*Endymion*の趣旨は，やはりElizabeth Ⅰへ向けたオマージュそのもの，ということになると考えられる．そのことを裏書きする重要な情報として，*Endymion*に付されたエピローグを引いてみよう.

> Dread Soueraigne, the malicious that seeke to ouerthrowe vs with threats, do but stiffen our thoughts, and make them sturdier in stormes: but if your Highnes vouchsafe with your fauorable beames to glaunce vpon vs, we shall not onlie stoope, but with all humilitie, lay both our handes and heartes at your Maiesties feete.[5] (The Epilogue, 9-13)

*Endymion*の初版は1591年に出版されているので，このエピローグが初演時の状況を描いている保証は必ずしもないが，このパッセージに関し，G. K. Hunterは，“in 1588 the Paul's company—including Lyly, I suppose—have to face some opposition at court and hope to overcome it by the Queen's favour:”と示唆している.[6]

附属年表から明らかなように，この1588年は，Lylyのキャリアにとり極めて重大な年であった．Oxford伯爵夫人の死去により，すでにか細い繋がりでしかなかったであろう伯爵とのパトロネッジは，ほぼ完全に機能を停止し，そのために，おそらくLylyはCecilとの縁故，そしてその延長線上にいる女王からのfavor（愛顧）に新たな大いなる望みをかけていたと考えられる．そして，そこにちらつかされた祝典局長のポスト（“ayme all my courses att the Revells”）にLylyがどれほど大きな期待を寄せていたかは，期待が失意に変わった際のLylyの執拗な恨み節が雄弁に語っているとおりである.[7]

Ⅳ *Pap with an Hatchet* and a Lost Play

Lylyを翻弄したのは，彼の個人的なコネクションだけではなかった．1588年夏のアルマダ海戦，10月に発生したマーティン・マープレリト論争と，立て続けに宗教的・政治的荒波に揺さぶられる中，Lylyは致し方なくこの論争にかかわる選択を行ったように見える．論争への関与は，Canterbury大主教John Whitgiftに動員されたThomas Nasheとは違って，Lylyのケースでは，国政を統括していたCecilや女王との関係でむしろ理解すべきものだからである.

その結果，Lylyは，翌年の1589年10月前半頃に*Pap with an Hatchet*と題されたパンフレットを出版し国教会側で論陣を張っているが，実はその1節に，彼の後ろ向きの真情を吐露したとも理解できる文言が書き込まれている．*Pap with an Hatchet*の巻頭に置かれた序文とも言える箇所で，Lylyは本パンフレットの文体に触れ，“I was loath so to write as I have done,”（p. 42）と述べるにとどまらず,[8] 続く“To the Indifferent Reader”と題された箇所でも自己弁護の念押しをしている．

> I seldom use to write, and yet never writ anything, that in speech might seem undecent or in sense unhonest. If here I have used bad terms, it is because they [the authors of the Marprelate tracts] are not to be answered with good terms. (p. 46)

もちろん，これらの自己弁護は文体についてのものではあるのだが，同時代の劇作家の誰にもまして「文は人なり」であったLylyにとって，スタイルこそ彼のアイデンティティ・主体性そのものであり，それが侵害されることと引き替えにでも，この論争にコミットせざるを得なかったLylyの状況を，我々は考えるべきである．

ところで，Lylyはこの種のパンフレットの執筆と（おそらくは）同時並行的に，反マーティン劇を（少なくとも1本は）作劇したと考えられている．Lylyのものも含めた反マーティン劇そのものは残存せず，具体性のある公的な記録も一切見付かってはいないが，マーティン側のパンフレットである*Theses Martinianae*における言及など,[9] 状況証拠から確実なものと見なされている．*Theses Martinianae*の刊行が1589年の7月，*Pap with an Hatchet*の出版が同年の10月――こうした事象を突き合わせると，1589年の後半期はLylyにとり非常に重要なターニング・ポイントであったことが判明する．

さて，Lylyがこの論争に介入し，その一連の振る舞いの中での何かが，当局の許容する一線を越えたことが，おそらくは少年劇団の活動停止を招来したと述べた訳だが，1589年11月12日付けの枢密院の議事録には，Canterbury大主教・ロンドン市長・祝典局長宛てに，“the players take upon themselves to handle in their plaies certen matters of Divinytie and of State unfitt to be suffred,”等の注意喚起があり，この事態に対応するよう要請した書簡に関する記録が残されている.[10] したがって，少なくともこの時期までには，当局の，

検閲を中心とした演劇の規制強化が起動していたことは確かである．

しかし，いつ，どの段階で，どのようにして劇団が活動を停止してしまったかを知る手掛かりは残されていない．ただ，そうした中にあって，Lylyの戯曲の版本に付された序文が，劇団の活動停止の状況を，（間接的にではあるが）事実として伝えてくれている．それが，1591年の*Endymion*の初版に付された，印刷業者から読者へ宛てられた短い序文の冒頭である．

> SInce the Plaies in Paules were dissolued, there are certaine Commedies come to my handes by chaunce, (The Printer to the *Reader*, 1-2)

*Endymion*の書籍出版業組合への登記は，*Midas*と共に1591年10月4日に行われているが，通常こうした流出台本の場合権利関係の特定を急ぐのが常であろうから，遅くともこの時期までにはセント・ポール少年劇団の活動は終了していたと考えてよいであろう．

議論がやや込み入ってきたので，ここで関連事項を時系列で整理しておこう．(1) 1588年10月に論争が発生，(2) 1589年10月，Lylyが*Pap with an Hatchet*を出版，(3) (1) と (2) の間に，Lylyが反マーティン劇をおそらく執筆，(4) 1590年1月6日，*Midas*が御前上演される，(5) 1591年10月に*Endymion*と*Midas*が登記される．ここにさらに付け加えれば，*Midas*以降も，セント・ポール少年劇団を使って，Lylyは*Mother Bombie*（1589）と*Love's Metamorphosis*（1590）を執筆上演することが可能であったようである．

Lylyの反マーティン劇が，*Pap with an Hatchet*内での数箇所の言及を根拠に，[11] このパンフレットに先行する創作・上演であったとするなら――すなわち，おおよそ1589年の前半期のどこかであったとするなら――この反マーティン劇が惹起したであろう宗教的・政治的センセーションと，セント・ポール少年劇団の活動停止との間には，それなりのタイムラグがあったことになる．そしてこのことは，少年劇団がなぜ活動停止をしてしまったのかを考える上で，重要なファクターとなるように思われる．

Ⅴ Writing *Midas*

Lylyを取り巻くこうした環境を押さえた上で，次に*Midas*の創作について考えてみよう．すでに言及したように，*Midas*は1590年1月6日，セント・ポー

ル少年劇団の手により御前上演されている．と言うことは，遅くとも1589年の後半期には作劇されたと想定することが自然であろう．そしてこのことを裏書きすると思われる発言を，Gabriel Harveyが残している．

マープレリト論争やその後の文筆活動における応酬の過程で，Harvey兄弟はNasheと敵対関係になり，このことが後のHarvey-Nashe論争へと発展する訳だが，同様に論争のプロセスにおいて，LylyはHarveyから敵意を抱かれることになる．このような人間関係の中で，HarveyはLylyの*Pap with an Hatchet*に対抗して，1589年の11月5日に*An Advertisement for Pap-Hatchet and Martin Mar-Prelate*を書き上げる（ただし，この時点では手稿の形でおそらくは流通）．この中に次の1節が存在する．

> and all you, that tender the preseruation of your good names, were best to please Pap-hatchet, and fee Euphues betimes, for feare lesse he [Lyly] be mooued, or some One of his Apes [boys] hired, to make a Playe of you; and then is your credit quite vn-done for euer, and euer: Such is the publique reputation of their Playes. (p. 213)[12]

Harveyのこの攻撃的発言のポイントは，Lylyが時事的な人物攻撃を劇に取り込むところにあるが，*Midas*に明瞭なトピカル・アルージョンが多用されていること，またMidas王のロバの耳への言及（p. 215）や，*Pap with an Hatchet*への言及（p. 217）があることを踏まえて（だと思われるが），G. K. HunterはHarveyが指示する芝居を*Midas*であると判断し，御前上演に先立ってHarveyが観劇した可能性を指摘している.[13] さらに，Nasheが1590年の1月から2月頃に書いたと推定される*An Almond for a Parrot*の中にも，Midas王と黄金や，PanとApolloのコンテストへの言及が存在するため,[14] Lylyの*Midas*がこの時期新作として流通していたと考えられ,[15] 劇中のアルマダ海戦への明らかな言及をも踏まえてこのあたりの情報を総合すると，*Midas*の創作時期は広く取った場合，1588年の後半期から1589年の10月の間ということになる．そして，この期間はLylyがマープレリト論争に関わっていた時期とちょうど重なることを，ここで再度確認しておきたい．

では次に*Midas*そのものについて，プロットの概容を記述しておく．小アジア中部にかつて存在したフリギア王国のMidas王は，望みをすべて叶えるというBacchusの申し出に対し，恋愛・武力・黄金をそれぞれ体現する顧問官と協

議の上黄金を選択し，触れるものすべてを黄金と化す能力を願い出る．しかし，食事もすべて黄金となったため飢餓に苦しんだMidasは，神託を受け，パクトラス川で沐浴をすることで，この能力と手を切ることに成功する．ここまでが本劇の前半部で，3幕分に相当する．その後，森でApolloとPanの音楽コンテストに遭遇したMidasは，判断を誤り，Panを勝者としたためApolloの呪いを受け，ロバの耳を付与されてしまう．最終的にApolloの神託を受け入れたMidasから耳は脱落し，Midasは自らの高慢さを認識して幕となる．

Lylyの*Midas*という戯曲は，Midas王にまつわるよく知られた二つの神話を主筋とし，そこに，Midas王に仕える理髪師が手に入れた，黄金のひげの所有権をめぐるドタバタ的脇筋が付加されることで構成されている．主筋に関して言えば，Bacchusが与える能力をめぐる議論やその変奏，黄金化の能力およびロバの耳がもたらす悲しみに呻吟するMidasの嘆きなど，Lylyの戯曲に共通するダイナミックなアクションの欠如という現象を，ここでも確認することができる．

しかし，奇妙なことに，第3幕と第5幕のそれぞれで，つまりMidasが黄金化の能力を所望したことを反省する箇所，ならびにPanに勝利判定を下した愚かさをかみしめる箇所で，それまでの展開には十分提示されていなかった外国政策に関する野心すなわち征服欲に，Midasは唐突に言及する．先ず3幕1場から引用しておく．

> Have not I made the sea to groan under the number of my ships? And have they not perished, that there was not two left to make a number?...A bridge of gold did I mean to make in that island where all my navy could not make a breach…. Is not the country walled with huge waves? That doth Nature claim. Is he [the ruler] not through the whole world a wonder for wisdom and temperance? That is his own strength. Do not all his subjects, like bees, swarm to preserve the king of bees? That their loyalth maintaineth. (3. 1. 35-67)[16]

次に5幕3場から引用する．

> I perceive (and yet not too late) that Lesbos will not be touched by gold, by force it cannot; that the gods have pitched it out of the world, as not to be controlled by any in the world. Though my hand be gold, yet I must not think to

span over the main ocean. Though my soldiers be valiant, I must not therefore think my quarrels just. (5. 3. 110-16)

ここでMidas王が言及している「レスボス島」とは明らかにイングランドを指示している．2011年にAshgateから刊行された*The University Wits*シリーズのLylyの巻に収録された論文の中で，*Midas* を中心的な分析対象としたものは3本存在するが，そのすべてがこれらの台詞に注目している．David Bevingtonの“Lyly's *Endymion* and *Midas*: The Catholic Question in England”は，すでに触れたように，該当の台詞を中心に，アルマダ海戦前後の両国関係と，イングランド国内のカトリック教徒の置かれた状況を分析し，Elizabeth Iの叡智と寛仁さを本劇の意味として主張しようとするものである．

Leah Scraggの“John Lyly and the Politics of Language”は，Midas王をスペインのPhilip Ⅱの寓意と見なす従来からの解釈に対して，Lylyの用いる台詞を記号論的に分析し，その意味作用の揺らぎや不確かさを主張しようとするものだが，*Midas* という戯曲の持つ政治的ニュアンスを前提としていることに変わりはない.[17]

Annaliese Connollyの“‘O unquenchable thirst of gold’: Lyly's *Midas* and the English quest for Empire”は，Midas王が伝統的に暴君として表象されてきたことを踏まえ，Midas王の黄金への欲望を当時のスペインの新大陸での金銀搾取と重ね合わせることで，そのスペインに追随しようとしていたイングランドの帝国主義的野望をえぐり出そうとする，徹底した植民地主義的・帝国主義的読解となっている.[18]

これらの，比較的近年に刊行された*Midas* 解釈は，この戯曲が持つ政治的時事言及性を最大限に拡大し，解析しようとするものである．先にHarveyからの引用でも指摘したように，確かにLylyは同時代の人間から見た場合，時事ネタに依存する，あるいは時事ネタを得意とする芝居書きとして映っていたように思われる.[19] そのことを裏書きする同時代の証拠を，もう1点引用しておこう．

I pray you take heed and beware of my lord of Oxenford's man called Lyly, for if he see this letter he will put it in print or make the boys in Paul's play it upon a stage.[20]

この証言は，1584 年に，Jack Roberts という人物が Sir Roger Williams に宛てて警告したものだが，Harvey の 5 年前においても 1 部の同時代人の Lyly 評価が同一である点には留意する必要がある．

しかし，Lyly という劇作家は，アレゴリカルな手法を用いることが多い後期喜劇においてさえ，Elizabeth I との同定を除けば，劇中人物やプロット上の出来事の特定に関して，非常に慎重に振る舞うことを特徴としている．それは，少年劇団を使っての御前上演という，*Campaspe* 以来の Lyly の「なりわい」が要請してきた一種の「かせ」，つまり制御のメカニズムと考えることもできるであろう．実際，先に言及した Leah Scragg は，Lyly の戯曲における意味作用の不確かさを主張していたし，2014 年に *John Lyly and Early Modern Authorship* を上梓した Andy Kesson も，こうした特質を“elusive”という用語で説明していた．[21]

さて，それらのことを踏まえて考えた場合，Philip II もしくはネーデルラント総督 Alba 公爵という明瞭な表象を備えた *Midas* は，異色の存在と言わなければならない．もちろん，こうしたことが許容された環境として，アルマダ海戦勝利という事象が存在し，その勝利から日も浅からぬ時期の，熱狂的愛国心が可能にした現象であったことは言うまでもない．しかし，Lyly が従来の持ち味を捨て，大胆な，挑戦的とも言える描写を試みた，その理由も我々は考える必要がある．Lyly が *Midas* で行ったことは，スペインのネガティヴな表象であることは当然としても，Lyly が想定した実際の効果は，むしろそのネガティヴな表象を通して，Elizabeth I のポジティヴな表象を，より強く照らし出すことであったと考えられる．では，なぜ Lyly はそうする必要があったのであろうか．

Ⅵ Lyly with the Children of Paul’s

そのことを考えるためにも，ここで再び，この時期の Lyly とセント・ポール少年劇団の話題に立ち返りたい．ポイントは，Lyly がどのような形で少年劇団をコントロールしていたか，ということになる．Lyly が *Campaspe* や *Sappho and Phao* の御前上演を果たした直後の時期に当たる，1584 年 5 月 22 日，セント・ポール大聖堂附属の聖歌隊のマスターに Thomas Gyles が就任し，1600 年の 7 月までこの職を務める．Gyles は同時に，1584 年から 91 年までその劇場のマネジャーも務めることになる．通常の演劇史の記述に従えば，Lyly

とGylesは「共同で」少年劇団の指揮をしたとされているが，その役割分担や劇団との関わり具合など，詳細な実態は分かっていない．ただ，すでに引用した，同時代のLylyに関する証言に基づけば，Harveyは“some One of his Apes hired, to make a Playe of you;”と述べ，Robertsも“he will put it in print or make the boys in Paul's play it upon a stage”という表現を使用している．さらにHarveyは，先に引用した1589年の*An Advertisement for Pap-Hatchet and Martin Mar-prelate*の別の箇所でも，“He [Lyly] hath not played the Vicemaster of Poules, and the Foolemaster of the Theater for naughtes;”（p. 212）と，揶揄を込めた記録を残している．こうした発言に依拠する限り，セント・ポール聖歌隊の，劇団としての活動面に関しては，Lylyが前面に出て指揮を取っており，かなりの裁量権と自由度を持ってコントロールを行っていた，と考えてよいように思われる．

さて，もしそうだとすると，マープレリト論争の際にも，Lylyの思惑に応じて少年劇団を動員した可能性が考えられる．その結果，劇団は活動停止に追い込まれた訳だが，ここでこの現象を，広義のエリザベス朝演劇における筆禍事件のコンテクストに置いて考察してみよう．通常の筆禍事件の場合，その対応としていくつかのケースが想定される：(1) 上演の即時停止，(2) 劇作家の処罰，(3) 劇団の処罰，(4) 劇団員の処罰など．この規準に照らした場合，劇団全体の長期間にわたる活動停止という現象は，極めてレアな事象と言わざるを得ない．もちろん，ここには，成人劇団とは違って，宗教組織に附属する聖歌隊という，国家権力がダイレクトに干渉できる構造そのものが関わっていて，先ずそのことを認識しておくことが大切だが，同時に，これだけの厳罰を引き起こした芝居自体にも注意を払っておくことが重要であり，この点についてさらに後ほど触れてみたい．

ところで，今回の筆禍事件において，不可思議な現象が2点存在する：それは，Lyly自身が処分されていないこと，および問題の戯曲に関する情報が一切残されていないことである．Lylyの場合，自在に駆使できる劇団を失ったことが（少なくとも本人にとっては）懲戒処分と言えるのだが，明らかな刑法的な処罰は受けていない．筆禍事件において，処罰が当然の場面で処分がなされていない場合，一般的にはそこに何らかの影響力が行使されたのではないかと推測され得る．Lylyのケースでは，当人がマープレリト論争に当局側の反駁者として駆り出された，という事情はあるにしても，今回の状況でもこの側面を検証してみる価値はあると思われる．

次に2点目の情報隠蔽についてだが，筆禍事件の中には，*The Isle of Dogs*（1597）や*A Game at Chess*（1624）など事件にまつわる情報が欠損しているという点で，多少類似の事例がない訳ではない．しかし，戯曲名はおろか，該当の戯曲が巻き起こしたであろうセンセーションとその波紋自体が，公式文書はもとよりパンフレットなどにさえ残存していないのは，奇異と言ってよいであろう．これはどう考えればよいのであろうか．マープレリト論争において，相手を凌駕する論陣を張るため，Lylyがやむなくマーティン的スタイルを採用したことは，すでに言及したとおりだが，一つの可能性として，仮にLylyが文体レヴェルにとどまらず，マーティン側の土俵に乗る形で，論争そのものの焦点――すなわち，国教会の主教システム（episcopacy）――それ自体に触れるような芝居を投入したとした場合（実際のところ，*Pap with an Hatchet*の中に，それを匂わせるようなLyly自身の発言が存在する），[22] 政治・宗教一体のイングランドの国政を預かるCecilが発動したであろう強権は，十分に想定し得る，蓋然性のある選択肢と考えられる．

政治家としてのCecilは，遠い親戚筋に当たるLylyのキャリアにおいて，直接的な支援を施すことはなかったものの，間接的な形での庇護的な振る舞いは時に行ったように思われる．今回の論争の事後処理においても，今まで記述してきた様々な状況や要素を勘案した上で総合的に判断すれば，Lylyの人身に対しては保護的な影響力を，Cecilは発揮したのだと考えてよいのではないであろうか．そして，セント・ポール少年劇団の活動停止にまつわるタイムラグも，深慮遠謀にたけたCecilによる，表だった動きをすべて回避した，水面下での幕引き的対応から説明できる可能性を考えてよいのではないであろうか．

Lylyが，なぜアンタッチャブルなトピックに手を出すような，リスキィな行動に出たのかは不明だが，本来“elusive”な作劇を持ち味とする彼が，何の対策も講じず，予防線も張らずに論争に参戦したとはやはり考えにくい．ここで，マープレリト論争と*Midas*の作劇がシンクロナイズしていたこと，そして*Midas*においてLylyが，大胆な，挑戦的とも言える劇作術を試みることで，女王に対するより一層の訴求効果を狙っていたことを思い出しておきたい．

おそらくLylyの戦略としては，2通りのものがあり得たのであろう．一つは，マープレリト論争での貢献と*Midas*における女王賛美とがもたらす相乗効果であり，もう一つは，論争におけるリスクを*Midas*における明白なオマージュで回避し，自らのキャリアを管理し，保身を図ろうとするリスク・ヘッジ的な振る舞い，ということになるであろうか．しかし，Lylyにとり残念なことに，

*Midas*において見せた意欲的なドラマトゥルギーも，少年劇団の活動停止という結果を見る限り，オックスフォード大学におけるフェロー申請と同様，また祝典局長を目指した猟官行動同様，結局のところ功を奏することはなかったことになる．

＊ 本論は，平成 26～28 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））「エリザベス朝宮廷政治文化と演劇興行のインターフェイス―少年劇団の触媒機能を中心に」（課題番号 26370269））の成果の 1 部である．

注

1 佐野隆弥，「ジョン・リリーの出発――セシル，オックスフォード伯，『キャンパスピ』――」，英知明他編『シェイクスピア時代の演劇世界――演劇研究とデジタルアーカイヴズ』（福岡：九州大学出版会，2015 年），77-91 頁.
2 G. K. Hunter, *John Lyly: The Humanist as Courtier* (London: Routledge & Kegan Paul, 1962) pp. 36-88.
3 Leicester伯を読み込む立場は，C. F. Tucker Brooke, “The Allegory in Lyly’s *Endimion*,” *MLN* xxvi (1911): 12-15; Oxford伯との関係に関しては，J. W. Bennett, “Oxford and *Endimion*,” *MLA* 57.2 (1942): 354-69.
4 David Bevington, “Lyly’s *Endymion* and *Midas*: The Catholic Question in England,” *Comparative Drama* 32 (1998): 26-46.
5 *Endymion*からの引用は，R. W. Bond, ed., *The Complete Works of John Lyly* (Oxford: Clarendon P, 1902), Vol. 3 に拠る.
6 Hunter 77.
7 佐野　86-89 頁.
8 *Pap with an Hatchet*からの引用とページ数表記は，Leah Scragg, ed., *Pap with an Hatchet: An Annotated, Modern-Spelling Edition* (Manchester: Manchester UP, 2015) に拠る.
9 Evelyn B. Tribble, *Margin and Marginality: The Printed Page in Early Modern England* (Charlottesville: UP of Virginia, 1993) p. 114.
10 E. K. Chambers, *The Elizabethan Stage*, vol. 4 (Oxford: Clarendon P, 1951), p. 306-7.
11 例えば，pp. 85-86.
12 *An Advertisement for Pap-Hatchet and Martin Mar-Prelate*からの引用とページ数表記は，A. B. Grosart, ed., *The Works of Gabriel Harvey, D. C. L.* (New York: AMS P, 1966), Vol. 2 に拠る.
13 Hunter 76.
14 Bond 111.
15 David Bevington, introduction, *Galatea, Midas*, eds. G. K. Hunter and David Bevington (Manchester: Manchester UP, 2000) 115.
16 *Midas* からの引用は，G. K. Hunter and David Bevington, eds., *Galatea, Midas*に拠る.

17 Leah Scragg, “John Lyly and the Politics of Language,” *Essays in Criticism* 55 (2005): 17-38.
18 Annaliese Connolly, “‘O unquenchable thirst of gold’: Lyly’s *Midas* and the English quest for Empire,” *Early Modern Literary Studies* 8 (2002): 1-36.
19 Lyly自身，*Midas* のプロローグの冒頭で，“Gentlemen, so nice is the world that for apparel there is no fashion, for music no instrument, for diet no delicate, for plays no invention but breedeth satiety before noon and contempt before night.” (The Prologue in Paul’s, 1-4) と述べ，観客の嗜好の変化の速さを嘆いているが，このことは同時に，観客の好みに対するLylyの観察眼と配慮をも物語っている．
20 Hunter 76.
21 Andy Kesson, *John Lyly and Early Modern Authorship* (Manchester: Manchester UP, 2014) pp. 103-37.
22 “Would it not be a fine tragedy when Mardocheus shall play a bishop in a play, and Martin, Haman,” (p. 86). もちろんこの1節はLylyによる表現上の仮定もしくは構想であって，これをもってLylyがこの種の劇を上演したと断定することはできない．しかしながら，少年劇団の長期間にわたる活動停止を視野に入れた上でこの発言を検証する時，主教が舞台上に出現した可能性は高まると考えられる．

参考文献

Alford, Stephen. *Burghley: William Cecil at the Court of Elizabeth I*. New Haven: Yale UP, 2008.
Alwes, Derek B. “‘I would faine serve’: John Lyly’s Career at Court.” *Comparative Drama* 34 (2000/2001): 399-421.
Appleton, Elizabeth. *An Anatomy of the Marprelate Controversy 1588-1596: Retracing Shakespeare’s Identity and That of Martin Marprelate*. Lewiston: Edwin Mellen P, 2001.
Astington, John H. *English Court Theatre, 1558-1642*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
Bennett, J. W. “Oxford and *Endimion*.” *MLA* 57.2 (1942): 354-69.
Bevington, David. “Lyly’s *Endymion* and *Midas*: The Catholic Question in England.” *Comparative Drama* 32 (1998): 26-46.
Black, Joseph L., ed. *The Martin Marprelate Tracts: A Modernized and Annotated Edition*. Cambridge: Cambridge UP, 2008.
Bond, R. W., ed. *The Complete Works of John Lyly*. 3 vols. Oxford: Clarendon P, 1902.
Brooke, C. F. Tucker. “The Allegory in Lyly’s *Endimion*.” *MLN* xxvi (1911): 12-15.
Chambers, E. K. *The Elizabethan Stage*. 4 vols. Oxford: Clarendon P, 1951.
Connolly, Annaliese. “‘O unquenchable thirst of gold’: Lyly’s *Midas* and the English quest for Empire.” *Early Modern Literary Studies* 8 (2002): 1-36.
Dutton, Richard. *Mastering the Revels: The Regulation and Censorship of English Renaissance Drama*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 1991.
Gair, Reavley. *The Children of Paul’s: The Story of a Theatre Company, 1553-1608*. Cambridge: Cambridge UP, 1982.

Grosart, Alexander B., ed. *The Works of Gabriel Harvey, D.C.L.* 3 vols. New York: AMS, 1966.
Harbage, Alfred. *Annals of English Drama 975-1700*. Rev. S. Schoenbaum. London: Methuen, 1964.
Hunter, G. K. *English Drama 1586-1642: The Age of Shakespeare*. Oxford: Clarendon P, 1997.
———. *John Lyly: The Humanist as Courtier*. London: Routledge & Kegan Paul, 1962.
Kesson, Andy. *John Lyly and Early Modern Authorship*. Manchester: Manchester UP, 2014.
Logan, Robert A., ed. *The University Wits*. 6 vols. Farnham: Ashgate, 2011.
Lyly, John. *Galatea, Midas*. Ed. G. K. Hunter and David Bevington. Manchester: Manchester UP, 2000.
———. *Pap with an Hatchet: An Annotated Modern-spelling Edition*. Ed. Leah Scragg. Manchester: Manchester UP, 2015.
Saccio, Peter. *The Court Comedies of John Lyly: A Study in Allegorical Dramaturgy*. Princeton, NJ: Princeton UP, 1969.
Scragg, Leah. "Angling for Answers: Looking for Lyly in the 1590s." *The Review of English Studies* 67 (2016): 237-49.
———. "John Lyly and the Politics of Language." *Essays in Criticism* 55 (2005): 17-38.
Shapiro, Michael. *Children of the Revels: The Boy Companies of Shakespeare's Time and Their Plays*. New York: Columbia UP, 1977.
Stern, Tiffany. *Documents of Performance in Early Modern England*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
Tribble, Evelyn B. *Margin and Marginality: The Printed Page in Early Modern England*. Charlottesville: UP of Virginia, 1993.

勝山貴之.「エリザベス崇拝と劇作家ジョン・リリー――少年劇団の再結成とリリーのリバイバル」. 同志社大学人文学会『同志社大学英語英文学研究』89 号（2012 年）. pp. 39-64.
———.「女王陛下の少年劇団――劇団・劇場・宮廷上演――」. 同志社大学英文学会『主流』第 74 号（2012 年）. pp. 1-19.
佐野隆弥.「ジョン・リリーの出発――セシル，オックスフォード伯，『キャンパスピ』――」. 英知明他編『シェイクスピア時代の演劇世界――演劇研究とデジタルアーカイヴズ』（福岡：九州大学出版会，2015 年）. pp. 77-91.
杉浦裕子.「ジョン・リリーとセント・ポールズ少年劇団――マープレリト論争への関わり――」. 英知明他編『シェイクスピア時代の演劇世界――演劇研究とデジタルアーカイヴズ』（福岡：九州大学出版会，2015 年）. pp. 93-114.

APPENDIX 1

John Lyly の戯曲と上演劇団

1584 *Campaspe* Oxford's Boys
1584 *Sappho and Phao* Oxford's Boys
(1584 *Agamemnon and Ulysses* Oxford's Boys at Court)
(Anonymous (possibly De Vere, E.) 27 Dec.)
1585 *Gallathea* Paul's
1588 *Endymion, the Man in the Moon* Paul's at Court
1589 *Midas* Paul's
1589 *Mother Bombie* Paul's
1590 *Love's Metamorphosis* Paul's
1593 *The Woman in the Moon* Unknown

No.	タイトル 上演劇団	Blackfriars St. Paul's	Court	Stationers' Register	出版年	推定創作年代 その他
1	*Campaspe* Oxford's Boys	上演あり	1584.1.1	1597.4.12	1584	1580-84
2	*Sappho and Phao* Oxford's Boys	上演あり	1584.3.3	1584.4.6	1584	1582-84
(3)	*Agamemnon and Ulysses* Oxford's Boys		上演あり		Lost	1584.12.27 以前
4	*Gallathea* Paul's	1584-85 に 上演の可能性	1588.1.1 (revived?) Greenwich	1585.4.1 1591.10.4	1592 (1591?)	1584-88
5	*Endymion* Paul's		1588.2.2 Greenwich	1591.10.4	1591	1588.2.2 (?) 以前
6	*Midas* Paul's	上演あり? Harvey 観劇?	1590.1.6	1591.10.4	1592	1589-90
7	*Mother Bombie* Paul's		数度上演 劇場不明	1594.6.18	1594	1587-90
8	*Love's Metamorphosis* 1. Paul's, 2. Chapel			1600.11.25	1601	c.1588-90 2. の上演は 1600-1
9	*The Woman in the Moon* Unknown		上演あり	1595.9.22	1597	1590-95 韻文劇

APPENDIX 2

Edward de Vere, John Lyly and William & Robert Cecil 関係年表

1550 Edward de Vere生誕
1554 John Lyly生誕
1562 第16代Oxford伯死去．Edwardは女王の後見を受け，Cecil家に預けられる．
1567 Oxford，グレイズ・インに入る
1569頃 Lyly，オックスフォード大学モードリン学寮入学
1571 Oxford，成人．William Cecilの娘Anneと結婚．
1572 Oxford，William Cecilのコントロールから外れる
1574 Lyly，フェローへの推薦をWilliam Cecilに依頼．
Oxford，女王から浪費に関し訓戒を受ける．許可なく大陸を訪問し，親カトリックを疑われ，女王の怒りを買う．枢密院入りを要求するも拒絶される．
1575 Lyly, M.A.修得
1576 Oxford，長女の認知をめぐって，妻やCecil家と不仲になる
1578 Lyly, *Euphues: The Anatomy of Wit* 出版
1580 Lyly, *Euphues and His England* 出版
Oxford，複数の劇団，音楽家集団のパトロンとなる
1581 Oxford，Anne Vavasourとの一連のスキャンダル（～1582）．ロンドン塔に監禁される．1583年6月まで宮廷から追放される．
1583 Lyly, Beatrice Browneと結婚．
Oxford，11月にブラックフライアーズの施設の又貸し権を購入，Lylyに与える．
Lyly，オックスフォード少年劇団のマネジャーとしてHenry Evansを任用．
1584 Lyly, *Campaspe* (1. 1) と*Sappho and Phao* (3. 3) を御前上演．その後，ブラックフライアーズの施設の権利を失う．
1587 2月8日，Mary, Queen of Scots 処刑
1588 6月5日，Oxford伯爵夫人Anne（William Cecilの娘）死去．LylyとOxfordとの関係消滅．
1588 Lyly，祝典局長就任に関する手応えを女王より得る
1588 7月－8月，アルマダ海戦
1588 10月，マーティン・マープレリト論争（～1589）始まる
1589 10月前半，Lyly，*Pap with an Hatchet* 執筆
1589 Lyly，懐中選挙区代表の議員となる（1593，1597-98，1601も）
1590 Robert Cecil, Secretary of State就任
1592 Lyly，ロンドンを離れ，妻の財産で生活する
1595 Lyly，この年までにロンドンに戻り，有力者に援助を嘆願する
1598 William Cecil，死去
1601 Essex伯の反乱
1604 Oxford，死去
1606 Lyly，死去

APPENDIX 3

Midas 関連年表

1588 年 7 月	アルマダ海戦開始
1588 年 10 月	Martin, *The Epistle* 刊行，マープレリト論争始まる
1589 年夏頃	反マーティン劇上演
1589 年 7 月	Martin, *Theses Martinianae* 刊行
1589 年 10 月前半	Lyly, *Pap with an Hatchet* 刊行
1589 年 11 月 5 日	Harvey, *An Advertisement for Pap-Hatchet and Martin Mar-prelate* 刊行
1589 年 11 月 12 日	検閲強化に関する枢密院の記録
1590 年 1 月 6 日	*Midas* の御前上演
1590 年 1 月頃	Nashe, *An Almond for a Parrot* 執筆
この間	セント・ポール少年劇団の活動停止
1591 年 10 月 4 日	*Endymion* および *Midas* の書籍出版業組合への登記